ワールドシリーズの夜に

日本歯科大学新潟生命歯学部　耳鼻咽喉科学
佐　藤　　雄一郎

本稿が掲載される３月下旬には、今回のWBC（World Baseball Classic）の結果が出ている頃だろう。日本の連覇は叶ったのか、、、、３年前よりメジャー選手も多く各々が円熟の域に達しており、若手の成長も著しい侍たちの活躍に期待したい。さて、前回のWBCで主役を演じた大谷選手、山本選手たちは、あの大会後もパフォーマンスを落とすこともなく、2025年10月のドジャースとブルージェイズのワールドシリーズで劇的な活躍をわれわれに見せてくれた。その超人的なプレー、打った！ホームラン！投げた！三振奪取！だけでも感動するのだが、野球愛好人としての私に訪れたのは、大きい山のような、深い谷のような、内面的な思索にトライすることであった。野球には独特な野球道という表現が存在する。この言葉が存在すること自体が、ベースボールを野球と翻訳した野球黎明期の先達*のなにやら不思議な熱を感じるところである。そう、何を言いたいのか、、、私の野球論は表面上のパフォーマンスという技術論のみではなく、そこに至るまでの内面のプロセスにフォーカスを当てる傾向がある。この随筆は、2025年ワールドシリーズ登場人物たちの内面からの外面を妄想してみた一文である。

１．信じたいもの

ワールドシリーズ最終戦。
ロバーツ監督を、責める気にはなれなかった。

３回裏。
大谷翔平を、そのまま続投させた。
結果だけを見れば、誤りかもしれない、少なくとも私にはそう見えた。
それでも監督は、信じたいものに賭けたのだろう。監督という仕事は、孤独だ。われわれの医療もそう、チームによる議論もあるが決断の瞬間、誰も助けてはくれない。
それでも、それだからこそ、、、信じる者に賭ける。
それが、指揮官としての矜持なのだろう。

スポーツの現場では、しばしば理屈よりも「心の温度」、理屈に立脚した「直感」が勝敗を分ける。数字や確率が全てを語るように見えても、最後の一手を選ぶとき、そこには「人を信じる」という非合理な勇気がある**。
ロバーツはそれを選んだ。
それは敗北の原因ではなく、むしろ彼がまだ“生きた野球”をしている証拠だった。

２．沈黙の気配

大谷はスリーランを被弾した。
スタンドの喧噪が遠のき、ベンチの空気がひんやりと冷えた。

敗北の気配は、音を立てずに忍び寄るものだ、知らないうちに野球の流れは変わる。

ブルージェイズは強かった。
シャーザーを筆頭に、采配も呼吸も揃っていた。
第３戦の延長18回、あの長い夜の後でも、負けても彼らは揺るがなかった。

だが、、、ただ一人、計算の外にいた男がいる。

---

* ベースボールを野球と訳した人物は正岡子規と思っていたが、実は、明治時代の教育者、中馬庚（ちゅうま？ちゅうまん？かのえ）である。明治草創時代の学生野球育ての親。1970年野球殿堂入り。一時期、新潟中学（母校新潟高校）で教鞭を執った。
** イチロー氏は現代野球の数字づくめのプレーや試合運びに閉塞感を覚えている。それが良く分かるのは、彼の引退会見における現代野球への警鐘である。今のゲームは観客の感情を奪っているという発言が印象に残る。

３．職人の引き出し

山本由伸。

中０日。連投、常識ではありえない登板だった、高校野球ではない。
それでも彼は、淡々とマウンドに立つ。

疲れは隠せない。
抜け球、引っかけ。
それでも、崩れない。

経験からくる己の引き出し、、、、。
それは、投手という職人の調整の技だ。

肩の張り具合、肘の違和感、肩甲骨の滑り。
踏み込みの深さ、軸足の粘り。
指先の掛かりと、縫い目の噛み具合。

これらを感じて考えて、そして、心拍の波を数え、呼吸を整えるのだろうか。迷いのノイズを消し、覚悟の静けさのみ際立たせる。心のピントを“いまできること”に合わせる。

そんな彼の背後で、ドジャースというチームが、もうひとつの職人芸を見せていた。

３回、レフトフライ。わずかな走塁ミスを逃さず、２塁転送のゲッツー。
守備陣全員が気配を共有していなければ、起こりえないプレーだと思う。

そして最終回の満塁ピンチ。前進守備。
セカンドの脇を抜けそうな打球を、若い内野手が横っ跳びに掴み、本塁へ送球。

フォースアウト。
ランナーのホームまで距離は、ほんの半歩。その半歩を詰めるための準備を、彼らは日々、積み上げてきたに違いない。
わずかな隙を見逃さない、ひとりひとりが人ごとではない自分ごとにしているチーム。
彼はいつも、勝利の後に仲間の名を口にする。
「自分は、守られている」と。

マウンドで孤独を抱えながら、それでも孤独ではないという矛盾、彼のダイアモンド。
だからこそ、あの球が生まれる。ひとりの技ではなく、チームの呼吸が混ざった球が。

４．夜空の放物線

11回表。
ウィル・スミスの打球が、夜空に消えた。逆転ソロ。ブルージェイズのベンチから、音が消えた。

最後の一球。バットが砕けて、ゲッツー、試合終了。

３勝、防御率1.02、数字の裏に何かが宿っていた。

人はしばしば「数字」を盾にして、努力の過程や心の揺れを覆い隠そうとする。だが、ほんとうのプロフェッショナルは、数字を使って自分を語らない。
語るべきは、数字の向こうにある「姿勢」だ。

どんなにデータが発達しても、人の営みの核は“感覚”にある。「この感触なら行ける」と思える瞬間。そこに職人の誇りが宿る。

５．静かな答え

「野球少年に戻ったような、そんな気持ちでした」
その言葉は、小さく、しかし澄んでいた。

勝敗の先にあるもの、今日の自分を見つめ、できることを探すこと。それは、職人の生き方であり、私たちが日々の仕事で学ぶべき姿勢でもある。

医師も教師も、技術者も、自分の「調子」を見つめ、いま出せる力を見きわめること。焦らず、驕らず、その日の手応えを信じて働くこと。

大谷が放つ打球も、山本の一球も、そこに込められているのは「自分との対話」のような気がする。そしてその静かな対話こそが、あらゆる職業を支える見えない軸なのだと思う。人は誰しも、日々の中で自分の“引き出し”を確かめながら生きている。
あく引き出しもあれば、あかなくなった引き出しもある、そうでないものを分からなければ、そうであるものも分からない。年齢や立場に関わらず、生きるという仕事の本質なのだろう。